

て落車す、時にとりて世のさたにて侍きかゝるほどに順徳承久に時うつり事變せし後は、天下
いたくはれしきこともはべらざりけり、おほかたかの御代には、牛馬の事にもいとめづら
かに興ある御事どもおほく承及びしかども、あまりに久しくなりて、みなわすれ侍、同御代吉田
邊に、播磨僧都實名何と申と申人こそ、うしにとりてゆゑしきすき人にて侍しか、坊中に數十間
の牛屋をつくりて、洛中の病牛もしは小牛のゆくするを、かひたつる事をこのみ沙汰しければ、
世こぞりて飼口をつけをきてあづけ侍しかば、さまざまいたはりたて、本主にかへしつかは
しけり、播磨僧都の牛文と申て、世につたはりて侍なり、又後堀河院御代の程にや、傳法院法師御
房道嚴五明の道くらからずして、人畜の醫療も鏡をかけておはしまし、が牛の事その隨一に
て、當道の先達にはこれをぞあふぎ申侍し、さても後嵯峨院は末代の明王、何事もむかしにはち
すめでたきはなやかなる御事にておはしまし、に御隨身御牛飼までもすぐれたるともがら
林をなして侍き、御馬御牛も名をとめたるおほくきこえ侍き、寛元四年御脱履のはじめ、西園
寺太政入道殿公もとより牛馬の御沙汰世にすぐれておはしましければ、御隨身御牛飼も、彼
御かたよりめし進せられ侍き、孫太郎鷹法師、賽王丸等也、これらかたへにこえたるともがらに
て侍き、又室町院子女宮にてわたらせおはしまし、かども牛の善惡をもしらせおはしまし
て、御このみ他事なかりしかば、彼院中の月卿雲客をはじめて、上下われもくとさたありしか
ば、牛逸物も、牛飼の遣牛も世におほく、この道の中興とも申べく侍き。

〔沙石集〕愚癡僧成、牛事

三河國ノ或山寺ニ、修學ノ二事闕タル若キ僧有ケリ、緣ニ付テ近江國ニ住ケルガ、年月經テ三河
ノ師ノ許ヘ行テ、坊ヘ入ラントスルヲ、小法師、棹ヲ以テ打ントス、コハ何事ゾト云ントスレドモ、
物モイハレズニゲ去ヌ、又行バ先ノゴトシ、遙々ト思ヒ立テ來リ、空ク歸ルニ及バズト思テ、又行